

企業最前線

熊谷支店発

～企業の現場に迫る

第118回 ラジエンスウェア(株)

～医療現場に新しい診療スタイルを提案～

大手電機メーカーから小規模ソフト開発業者までさまざまな業種が参入しているが、なかなか電子化が進まない医療現場。当社は小規模ではあるが今までの常識を覆し、新たな商品を開発するベンチャー企業として注目を浴びている。そこで、今回発表した全く新しいコンセプトの便利ツールとともに当社を紹介したい。

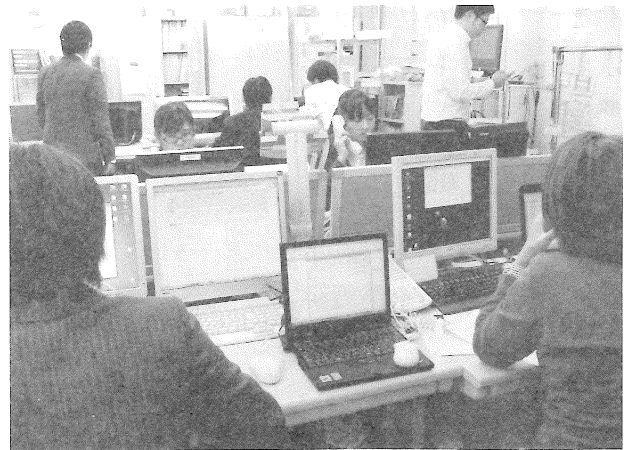
1) 本来の診療に専念できる環境作りを支援

当社は2000年(平成12年)1月に設立され、医療に特化した各種サービスを手がけている。代表の中嶋氏によると「医療現場でのIT化はレセプトの電子化や画像フィルムのデジタル化は進んでいるものの、カルテや伝票の電子化にはいくつものハードルがあり、まだ先になりそうです。3・11東日本大震災と津波災害、そして原発事故により、医療現場でも甚大な被害が発生しています。慢性疾患を持った患者さんにとって過去の履歴は欠かせないのですが、残念ながらほとんどが消滅しているようです。患者さんに関する情報は医療機関にとって重要なものでありながら、常に“地震”“落雷”“火災”“盗難”といった危険にさらされています。

そこで、すべての情報をデジタル化し、高セキュリティで安全なデータセンター(クラウド)側に保存するサービスの需要が高まっています。同時にクラウドの特徴を生かして、医療情報を共有化し、在宅患者さんなどを多くの医療従事者で支える仕組みも重要視されております」と、状況改善が急務の様子。

そこで、当社は医療現場に従事する医師やスタッフの負担を軽減させることで、本来の患者さんへの対応や診療に専念できる環境作りを支援しているという。

医師は患者さんと向き合い、患者さんの訴えによく傾聴しながら診療にあたるのが理想だ。スタッフをできるだけ余計な作業から解放することで、患者さんや医師のフォローに当たることができるようになると、院内の雰囲気もさらに良くなり患者満足度も向上する。



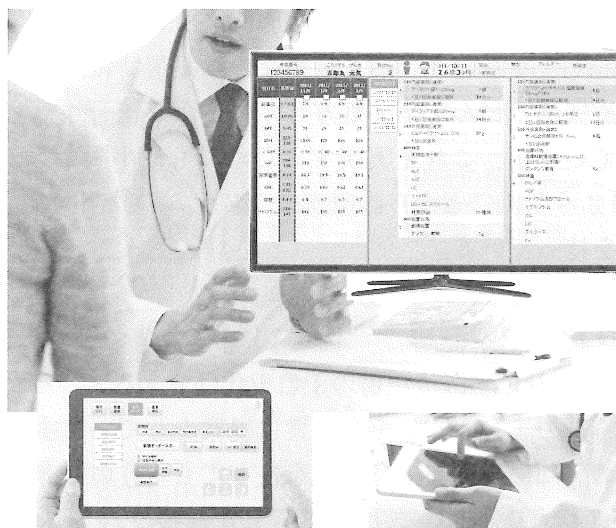
当社、カスタマーサポートセンターの様子

環境作りとしてまずは、院内をICT（Information and Communication Technology＝情報通信技術）化して転記や二重入力などのムダな手間を省く必要がある。しかし、クリニックでは7割以上が未だに紙カルテや紙伝票を手放せないままICT化ができていないのが現状だ。原因として、医師はパソコンなどIT機器を扱うことが苦手であったり、文字を記録するのにキーボードを叩いたり、知りたい情報を見つけるのに、何度もクリックしたりと煩雑な点があげられるという。「これでは患者さんを診ながらとても操作ができません」と中嶋社長。

「紙カルテの場合は、ペンでメモするだけで、周りのスタッフが転記して伝票を発行したり、コンピューターに入力したりしてくれるので楽なのです。その代わりに、周りのスタッフは処置や受付事務をやりながらの作業のため、忙しさから解放されません。それに加えて、医師の手書きメモを読み取る際の“読み取りミス”や“転記ミス”および“入力ミス”の可能性があることから過度の緊張を強いられます。このように医療現場は複雑で簡単にICT化ができないという現状があります」（中嶋社長）。

2) 診療支援システムを開発

長年にわたり医師やスタッフの負担を軽減させながら、ICT化を進める研究をしてきた結果、多くの実績を上げているラジエンスウェア(株)。当社が開発した「診療支援システム」の第1のコンセプトは『知りたい情報は大画面で閲覧し、操作はスマートタッチで簡単に』となっているところ。第2のコンセプトは『紙カルテ運用をそのまま残しても大丈夫』という点。また、セット登録を作ることで、同じような処方ボタンを押すだけでオーダーが出せるなど、できるだけ簡単に使えるようになっている。今までのICT化は1つの画面に複数の情報が一度に表示される仕様となっているため、ボタンや文字が小さく、高齢の医師から「見づらい」「疲れる」といった声が多く上がっていたという。そこで「診療支援システム」は見やすさと操作性を重視している。



開発した「診療支援システム」のイメージ

具体的な機能として、メイン画面側では、「患者基本情報」「検査結果」、「前回処方」「今回処方」が大画面で確認できる。操作端末側では「検査オーダー」「Do処方」「セットオーダー」「薬剤検索」「診療区分変更」「保険一括変更」など多くの便利機能があり、中でもデジタルペンで手書きした文字をテキスト化する機能があることで、患者ID検索や薬剤検索などがしやすくなった。

また、操作端末とメインモニターとの接続、およびネットワークもワイヤレスなので煩わしい配線がない。フル充電してあると、5時間以上使えるので昼休みに中間充電する程度で問題なく使うことができる。

ラジエンスウェア(株)

【企業コード】 910024341

【本 社】 児玉郡上里町堤696-7

【設 立】 2000年（平成12年）1月

【資 本 金】 8375万円

【代 表 者】 中嶋 吉男氏

【事業内容】 医療情報システム開発販売

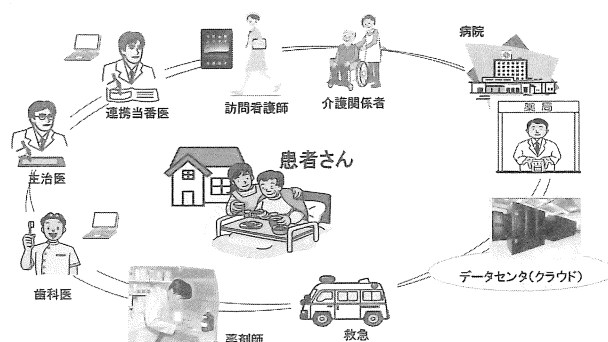
【年収入高】 約2億8100万円（2015年9月期）

【U R L】 <http://www.radianceware.co.jp/>

3) 診療支援システムの重要性

国は超少子高齢化社会を見据えて「地域包括ケア制度」の充実を図っている。「ここで欠かせないのが地域連携と在宅患者を取り巻くネットワーク作りです」と中嶋社長。しかし、ここでも連絡は“電話”で、資料は“FAX”と紙媒体が主流。本来はICT化による連携が必要なことは重々承知しているものの、残念ながら進んでいないのが現状だという。

「まずは主治医の先生からICT化して必要最小限のデータを共有化するためにも診療支援システムの役割は大きいとみています」（中嶋社長）。処方内容や病歴などを安全なデータセンターに保存することで、周りの関連職種の方がこれを見ながら対応できるという。最も重要なのは薬剤情報。禁忌やアレルギー、薬剤間副作用の問題もあり、何処の医療機関でどんな薬を処方しているかを統一して管理する必要がある。国はかかりつけ薬局制度を目指しているが、これを実現するためにも最小限として薬剤データを提供できるツールが必要とされている。「こうしたことから診療支援システムの役割はますます増加してくると予想できます」と中嶋社長は自信を持っている。



地域包括ケア、連携イメージ

4) 今後の展望

「当社は“医療現場のICT化はできるところからムリなく進めましょう”を合言葉に提案をしています。今の高齢の医師に高度なICT化を使ってもらうのは非常に難しいです。しかし、当社が開発した診療支援システムは、スマートフォンのように指タッチで簡単に操作できるため、高齢の医師でも使いやすくなっています」（中嶋社長）。

「今後は、機能を増やして行く予定だというのが、複雑になると使えなくなる医師も増えてくることが考えられる。したがって当社は「機能活用の有無」「文字の大きさ選択」「デザインの選択」などをユーザーごとに設定できるように開発中とのこと。「診療科や診療スタイル、医師の好みに応じて設定することで、“自分用の便利なツール”として手放せない存在になると思います」と中嶋社長。

「診療支援システムの販売ターゲットはクリニックと療養型病院や小規模病院です。全国にクリニックは約10万件、療養病院や小規模病院は約5千件あります。そこで当社は、便利なツールを安価に提供する体制を整えながら、多くのユーザーを確保していく考えです。結果的には、医師やスタッフの負担を軽減することで患者サービスの向上に貢献でき、地域社会のQOL (Quality of Life) の向上にもつながると確信しています」（中嶋社長）。

地域への貢献と病院スタッフの事務作業削減など病院内ICTシステムの先駆的な立場にある当社。今後の活躍に期待したい。



代表取締役社長 中嶋 吉男 氏